

出会いは人生の宝物 —女性の世紀を生きる—

島田 歌穂

司会：講演に先立ちまして、通信教育部長・花見先生よりご挨拶並びにご紹介がございます。

通信教育部長：みなさんこんばんは。一日の授業が終わりまして、大変お疲れのところにもかかわらず、こんなに多くの方が参加していただくことになりました。大変にありがとうございます。私ども通信教育部学会では、毎年この夏のスクーリングの時に特別講演会という形で素晴らしいゲストの方をお迎えして毎年講演会を行っております。今回は、大拍手で登場されたわけでありますけれども、女優・歌手として大活躍をされる一方、大阪芸術大学教授として大学でも教鞭をとられていらっしゃる島田歌穂さんをお迎えいたしました。大変有名な方でございまして、私から改めてなにかご紹介しなくてもいいのかなと思いますが、簡単にご経歴を紹介したいと思います。

1974年に子役としてプロデビューをされます。82年に、ミュージカル「シンデレラ」で初舞台を踏みます。87年には「レ・ミゼラブル」で大きな脚光を浴びられ、出演回数は、なんと1000回を超えたそうでございます。また、この「レ・ミゼラブル」の世界ベストキャスト、もっともすばらしいキャストにも選ばれ、イギリスの王室主催のコンサートにも出演されました。それを収録されたアルバムが、インターナショナルキャスト版という形で収録をされ、それがアメリカでグラミー賞を受賞される。実はわたくしの妻が島田さんの大ファンでございまして（笑）、以前、帝国劇場での「レ・ミゼラブル」のミュージカル、私連れていかれて、拝見したことがございます。本当にすばらしいミュージカルでございました。代表的なそれ以外の出演作品として、「ロミオとジュリエット」、「黙阿弥オペラ」、「ウエストサイド・ストーリー」、「江利チエミ物語」、「蝶々さん」など、もっとたくさんありますが、多数の作品にも出演されております。女優歌手としてミュージカルから演劇・コンサート・ライブ・CDなど幅広く活躍されています。楽曲のレパートリーはミュージカルはもちろんのことジャズからポップス、民謡まで幅広くカバーされているそうです。さらに素晴らしいと思いますが、芸術選奨文部大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀女優賞など多くの賞も授与されています。先ほど申し上げた通り、現在、大阪芸術大学で教授も務められていらっしゃるわけです。

なお、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、先ほど手を振っている方もいらっしゃいましたが、島田さんは、実は本学の通教生のお一人でございます。「出会いは人生の宝物—女性の世紀を生きる—」というテーマでご講演いただきま

す。興味深いお話を伺えるものと大いに期待をしているところでございます。どうか今日のご講演をしっかりと聴講していただき、明日の勉学に挑戦する新しいエネルギーに変えていただければと思う次第です。以上、簡単ではございますが、わたくしの挨拶とさせていただきます。大変にありがとうございました。

司会：どうも、ありがとうございました。それでは余計なことは司会は言わず、ただいまから、ご講演いただきたいと思えます。それでは島田歌穂先生よろしくお願いたします。

みなさまこんばんは。ただ今ご紹介いただきました島田歌穂と申します。連日本当に蒸し暑い中、いまちょうどスクーリング半ばごろでしょうか。みなさま本当にお疲れもたまっていられる頃かなっていう時に、それも明日試験！という、そんな大変な時に、こんなにたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

今ご紹介いただきましたが、私は通教生で、実は入学は2003年なんですね。11年前なんです。もしかして同じぐらいの入学の方は……あ、いらっしゃいました！もうかなり年月が経ってしまいましたが、とにかく私はスクーリングが大好きで、でもレポートを書くのが大の苦手で（笑）。これじゃ卒業できないと思いながら、今年は、来月に舞台の本番があり、ずっと稽古が入っておりますもので、夏期スクーリングは出られないなど本当に残念だったんですが、思いがけず今回このような形で講演をということでお話をいただきました。でも、私はあくまで一通教生という思いですので、創価大学で講演なんてあまりに恐れ多くて、ご辞退申し上げたいという思いでいっぱいだったのですが、本当にテーマは自由で大丈夫ですからと先生方に励ましのお言葉をいただきまして……このような光栄な場を与えていただきましたことに感謝いたします。今日は、去年の夏以来ですので一年ぶりに創大に伺わせていただき、なんだか涙が出るぐらいすごく嬉しくて、懐かしい顔も拝見できまして、懐かしい先生方にもお会いできまして、一気に学生気分に戻らせていただいております。

今日は、テーマは自由でいいですよとおっしゃっていただき、「出会いは人生の宝物－女性の世紀を生きる－」という、何だかたいそうなテーマをかかげってしまったなと思っておりますが……。実は、私は今年でデビューして40周年になりまして、（拍手）ありがとうございます。島田歌穂っていったいいくつなんだろう（笑）という素朴な疑問をお持ちになられていることかと思えます（笑）。こういう節目の年になりまして、今回ちょうどこういう機会をいただきましたので、今日はこれまでのいろいろな出会いを少したどらせていただけましたらと……。振り返りますと、本当にたくさんの出会いをさせていただいてきて、その出会いどれ一つが欠けても、いまの自分はないなど、本当に出会いの一つ一つが人生の宝物なんだなということ、この節目の年に、あらためて感じさせていただくことが多いんですね。まだまだ拙い人生ではありますが、今日は、これまでの様々な出会いをご一緒に振り返ら

せていただきながら、私にとりまして、これをまた新たな決意の時間にさせていただけましたら幸いです。どうぞよろしく願いいたします。座らせていただきます。

さあでは……今日はいろいろ写真をご用意させていただきましたので、少し……これぐらいの照明にさせていただきますが、みなさまちょうど夕食を召し上がった後で眠くなれる照明かもしれませんが、その時はどうかご自由に居眠りなさっていただいても結構です（笑）。

ではまず、私の生まれた頃に話を遡ってみたいと思います。これを言うと年がばれますが……昭和……（笑）もういいですね言っちゃいますよ。昭和38年。音楽家の父、これは父の晩年の写真ですけども……私は父と瓜二つですね。そして母。母は宝塚歌劇団の女優から、転向してジャズ歌手になったという人でありました。母はなかなかの美形だったんですが、私はまぎれなく父親似ということですね（笑）。小さいころによく「歌穂ちゃんお父さんにそっくりねー」って言われると泣いて怒っていたらしいんですけど……今思えば、父にかわいそうなことをしたと思っております（笑）。そんな両親の間に、私は一人娘として生まれました。わあ、かわいい！（笑）かわいかったですねー！ちっちゃい頃。父の名前が鳥田敬穂、尊敬の敬、敬礼の敬という字に稲穂の穂と書いて敬穂という名前でした。その「穂」をもらって、やはり父も母も音楽の世界に生きた人でしたので、「歌」という字をつけたいなと思ってくれたらしくて、歌に穂で歌穂という名前をつけられました。本名に歌という字を入れられてしまったという、何だか運命をここでもう決定づけられたような、そんな名前をつけてもらったんですね。母は私がお腹の中にいる時にまだジャズ歌手として現役で歌っておりました。ですから、もうまさに胎教から母のジャズの歌声を聴いていたような状況だったんですね。父は家で作曲したり編曲したり、またボイストレーナーとして歌を教えておりました。自宅には毎日のようにお弟子さんが次々といらしてレッスンしているんですね。ですから私は隣の部屋で、子守唄代わりのようにその発声練習ですとか、洋楽の英語の歌とかを聴いて、何だかわからないまま一緒に口ずさんだりしていました。まあ、今から思うと、ずっと家の中に音楽があふれていたような中で私は育ったんですね。また、物心ついた時からなぜかバレエを習わせてくれておまして、気がついたら私は歌ったり踊ったりすることが大好きな子供になっていたんです。

そして、この世界に入るきっかけがありました。昭和49年、1974年。バレエを習っていたことがきっかけで、テレビドラマに出てみませんか？というお話をいただきました。やはり、テレビドラマもすごく興味のある世界でしたので、ぜひ挑戦したいと思い、私は子役としてデビューすることになりました。デビュー作は、これは今思うとすごいタイトルです。「どっこい大作」という番組があったんですが、覚えていらっしゃる方おられますか？……ああ！いらっしゃいますね。世代がわかりますが（笑）。この番組、池田先生ご存じでいらしたでしょうか。主人公が大作君っていうんですよ、すみません、大作君なんて言っていていかかわからないですが（笑）。つらいことがあると、主人公が夕日の見える丘に登って「どっこい！どっこい！どっこい！」って自分を鼓舞して頑張るといって、いわゆる根性もののドラマ。

それに出演したのが私のデビュー作です。

そのあと初めてレギュラー番組が決まりました。それが、「がんばれ!!ロボコン」という番組でした。はい、先ほど「ロビンちゃん!」とお声をかけていただきました(笑)……ありがとうございます! 私はロビンちゃんというバレリーナ・ロボットの役を演じさせていただきました。……ご覧になられていた方いらっしゃいますか? わあ、たくさんいらっしゃいますね、嬉しいです! これがけっこうな人気番組となったんです。……ロビンちゃん、この写真ですね。当時、ロビンちゃんに憧れてバレエを習い始められたお嬢さんがけっこういらしたようなお話をうかがいました。この番組との出会いをきっかけに子役としてすごく順調にお仕事が続いていきました。

これがその後の子役時代ですね。いろんな番組に出させていただきました。これは「俺はあばれはっちゃく」。はっちゃくのお姉ちゃん役ですね。次々と子役としてのお仕事が続いていきました。私も学校に行くよりも撮影所に通う方が楽しくなってしまうと、子供心に「絶対女優になる!」なんて夢を描いた、そんな時代でした。

ところが、子役という、やはり子供から大人に切り替わる時期って、誰もが必ず苦労するんですよね。私も「歌穂ちゃんも、もうすぐそういう時期だから頑張れよ」なんて周囲の方に励ましていただく中、ちょうどそんなときに「アイドル歌手をやってみませんか?」というお話があったんです。アイドル歌手なんて柄じゃないな……と思ったんですが、その頃ちょうど第3次アイドルブームで、松田聖子さんとか、田原俊彦さんとか、わーっとアイドル時代が来たときで、せっかくのチャンスだからと、私もアイドルデビューを決意しました。これが昭和56年。デビュー曲「マンガチックロマンス」。すみません、照れちゃいますね。聖子ちゃんカット風にしちゃって……やはりちょっと無理しながらアイドル歌手やってみました(笑)。一応4曲のシングルレコードを出させていただいたんですが……ちなみに、アイドル時代の島田歌穂をご存じの方いらっしゃいますか?……いらっしゃらない(笑)。いいんです。当然なんです。本当に売れなかったんです。ちょうど近藤真彦さんと同じ年のデビューだったんですが、私は全然売れなくて……いやーどうしようかな、やっぱり私はこういう芸能界は向いていないのかな、なんてちょっと悶々とし始めた中、また次の出会いがありました。

ミュージカルのオーディションを受けてみることにしたんですね。ミュージカルと言えば、歌って踊ってお芝居して、と、好きなことがいっぱいできる、いつかは挑戦してみたいと思っていました。とにかくアイドルで売れなくて悶々としていてもしかたがないので、いちかばちかミュージカルのオーディションを受けようと、「シンデレラ」というミュージカルのオーディションを受けました。するといきなり主役のシンデレラ役で合格することができたんですね。18歳で初舞台を踏むことになります。これがシンデレラの時の写真、最初のポロポロの、いじめられている場面のシンデレラですね。これが私の初舞台となりました。でも初舞台でいきなり主役をいただいてしまって、本当に私につとまるんだろうか……と不安でいっ

ばいな中、必死で稽古を重ねて初日を迎えました。いざメイクをして、衣裳を付けて、お客様の前に立ったとき、何だか、自分がいままでまったく知らなかったような、ずーっと胸の奥底に眠っていた不思議なエネルギーみたいなものがお客様の前でブワーって出てくるような気がしたんですね。それで、「うわあ！ 楽しい！ もしかしたらここが一番自分が輝ける場所かもしれない！」って。「よし、私はこの舞台女優への道を歩いて行こう！」って、初舞台の初日の舞台の上で私は固く決意させていただくことができたんです。忘れられない瞬間でした。この初舞台で、私は自分の進むべき道を決意させていただくことができました。これは大きな出会いでしたね。

そして。決意をしたら、アイドル歌手はなんの未練もなくスパッとやめて（笑）、一からレッスンをやり直して、アルバイトしながらオーディションを受けて、という日々が始まりました。オーディションもいっぱい受けました。受かった作品もありましたが、落ちた作品もいっぱいありました。受かったといっても、そんなに急にはいい役がもらえるわけではなく、いわゆる「アンサンブル」といって、端っこの方で歌ったり踊ったり、セリフも一言あるかないかという感じで、なかなかスポットライトも浴びることができなくて。時々主演の方が近づいて来てくださると、その主演の方に当たっているスポットライトの端っこのへんまで来たりするんですね。そうすると一生懸命そこに乗り出してスポットライトの中に入る（笑）、いかに目立つかってというような、そんな戦いの日々だったんですけれども。でも、そういう中でも一つ一つ作品をやるごとに、「歌穂ちゃん、こんな役があるけどやってみる？」って言っていただいたり、「今度こんなオーディションがあるけど受けにおいでよ」って声をかけていただいたりして、少しずつ役をいただけるようになっていきました。

これがいわゆるミュージカルのアンサンブルやっていた時代の写真ですね。ここにいる、胸に大きな星の付いた衣装の……これが私です、ぷりっぷりでまん丸な顔……（笑）若さいっぱい、元気いっぱいでミュージカルをやっていた時代です。

そして……本当にありがたかったのは、この頃、ミュージカルをやりながら同時に、井上ひさしさんのお芝居にも出演させていただけたことです。これが初めて井上ひさしさんの作品に出させていただいた時の写真です。こまつ座公演「日本人のへそ」。一番左の端で大きな口開けて歌ってるのが私なんですが、ミュージカルではなくてお芝居の世界で、日本語の深さとか、難しさとか、言葉の大切さというものを学ばせていただいて、ただただカルチャーショックで、これが舞台人としてかけがえのない出会いとなっていきました。

また、この時期ちょうどアルバイトをしていたんですが、どんなアルバイトをしていたかと言いますと、当時たまたま私の父がピアノを弾いていたお店がありました。そこで二年半くらいの間アルバイトをさせてもらったんですが、ありがたかったことに、そこでアルバイトをしながら、毎日ジャズのスタンダードナンバーをお客様の前で歌うことができたんです。気づけば、バイト時代にジャズの基礎をしっかり学ぶことができたんですね。なかなか売れなくて、役ももらえなかったり、ち

よっと苦しい時代ではあったんですけど、今振り返ってみると何一つ無駄がなかったなって。歌・踊り・芝居、一つ一つの基礎を、その苦しかった時期に間違いなく学ばせていただくことができた。これも本当に大切な出会いの時期でありました。

さあ。そんな中で、また人生を大きく変えてくれた出会いがありました。昭和61年、1986年。ミュージカル「レ・ミゼラブル」のオーディションを受けたんですね。このポスター、みなさん一度はお目に触れたことがあると思いますが…… ある日、帝国劇場にミュージカルを見に行ったときに、大きな金色のポスターが貼られていました。このコゼットの絵を真ん中に、「あなたに白羽の矢が立つ」と大きなキャッチコピーが書かれていました。うわあ！ なんだろう、とよく見てみると、「レ・ミゼラブル」というミュージカルのオーディションが大々的に行われると、その応募要項が書いてあったんですね。これは何かすごいことが起きそうだなと思いました。でも、とにかくこれだけ大々的なミュージカルなので、絶対有名な方が大きな役をされるに違いないと思いましたし、ただ、海外からスタッフが来てオーディションしてくださるとのことで、これはもう参加することに意義がある！ という思いで応募しました。全国から老若男女プロアマ問わず1万2千人ぐらいの応募者がありました。私はその中でも3千人以上という一番競争率が高かったエポニーヌという役で応募したんですね。

それが1次審査、2次審査、3次審査、4次審査と進み…… 最終的にそのエポニーヌの役で合格することができました。(拍手) ありがとうございます。でもこの時ばかりは、嬉しいというよりも、あまりに大きな作品でいきなり大きな役をいただいてしまったので、本当に私につとまるんだろうか……って。稽古が始まり、稽古をすればするほど、これはドッキリカメラじゃないんだろうかと(笑)、もう本当に不安でいっぱい。でも、今の自分に与えていただいた使命の場であるならば、最大限に力を出させてください！ と、本当に毎日必死に祈りながら稽古を重ねていきました。

そして、いよいよ初日まであと1か月となった、忘れもしない1987年5月10日という日。ありがたいことに、人生の師匠、創立者池田先生に初めてお会いする機会に恵まれたんです。この時は第10回芸術部総会という大きな会合がありまして、そこに先生をお迎えすることができました。その会合で先生は、北原白秋の生き方を通して、長時間ご指導してくださいました。その時、私が命に刻ませていただいたご指導は、「本物になりなさい」というご指導でした。「大事なことは本質が光っているかどうかである。本物はどこまでいっても本物であり、偽物はどこまでいっても偽物である」。「芸術の道を探求されている皆さまは、世間の風評などに左右されず、自らの道を、日々、確かな足どりでたゆみなく進んでいただきたい」。……それぞれの技術を磨くとともに、生命の鏡をただただひたすら磨いて、なにものにも揺るがぬ本物の芸術家になりなさい！ というご指導でした。この「本物になれ！」というご指導を私は生涯の指針として深く生命に刻ませていただきました。これが私にとって、人生の師匠との原点を刻ませていただいた、生涯忘れえぬ瞬間でありました。

こうして、師匠に大きな勇気をいただき「レ・ミゼラブル」初日を迎えることができました。そして、この「レ・ミゼラブル」という作品は大評判となったんですね。……もしかしてご覧になられた方いらっしゃいますか？……すごい、たくさんいらっしゃる！ありがとうございます。帝劇でご覧になりましたか？あとは大阪とか……大阪でご覧になりましたか。10回?!すごい、ありがとうございます！あと名古屋公演もあったんですが、名古屋公演はご覧になられた方いらっしゃいますか？……あと札幌とか仙台でもやりました。福岡でもやりました。……あの方々は東京でご覧くださった方ですね。ありがとうございます！嬉しいです。この作品、本当に大評判となりまして、各マスコミ、新聞、雑誌、いろいろなメディアでこの作品が取り上げられ、中でも新人の鳥田歌穂という女優がとても頑張っているというふうに書いていただきまして……先ほどもご紹介いただきましたが、この作品により芸術選奨文部大臣新人賞をいただくことができました。そして、NHKの「音楽・夢コレクション」という音楽番組……ご覧になられた方いらっしゃいますか？レギュラーでやらせていただくことになり、それをきっかけに88年、89年と二年連続で「NHK 紅白歌合戦」にも出させていただきます。また、イギリスの王室主催の「ザ・ロイヤル・バラエティー・パフォーマンス」という毎年伝統的に行われておりますイギリス王室主催のチャリティー・コンサートへの出演というチャンスもいただきました。これは、毎年世界中のアーティストが集まって、女王陛下の前でそれぞれのパフォーマンスをお見せするというチャリティー・コンサートなんですが、87年に「レ・ミゼラブル」のカンパニーが出演することとなり、せっかく各国でやっているので世界中のメンバーを集めようということで、ニューヨークのカンパニーのアンジョルラス役の方、また、当時イスラエルでも「レ・ミゼラブル」は公演中で、イスラエルのジャン・バルジャン役の方、そして、エポニーヌ役は日本から歌穂を呼ぼうということで呼んでいただき、あとはイギリスのカンパニーの皆さんと一緒にエリザベス女王陛下の前で歌わせていただいたんです。これは、パフォーマンスが終わってから女王陛下が出演者一人一人にお声をかけてくださって握手していただいた時の写真です。これは、ちょっと手が写っていませんが……ちゃんと握手していただいています。女王陛下へのご挨拶の言葉で、「I'm very honored to meet you」という丁寧な言葉を教わっていたんですが、もう、女王陛下が握手して下さった瞬間、ぱあーっと飛んでしまい「Thank you very very much!」としか言えなくて（笑）、ベリーベリーマッチ……そんな情けないことになっちゃったんですが、本当に光栄な瞬間、すばらしい瞬間を経験させていただきました。このパフォーマンスには、日本人で出演したのはバレリーナの森下洋子さんがお一人目だったそうで、日本人としては私が二人目の出演者だったということなんですが、かえすがえすも、本当に夢のような舞台に立たせていただくことができました。

また、先ほどもご紹介いただきましたが、88年に「レ・ミゼラブル」の世界のベストキャストを集めたアルバムを作ろうということになりまして、その時も日本代表としてエポニーヌ役でオファーをいただき、シドニーにて全部英語でレコーディ

ングをさせていただき、それがミュージカル・ベスト・キャスト・アルバムに選ばれ、グラミー賞を受賞することもできました。本当にこの「レ・ミゼラブル」と出会えた瞬間に、私は舞台女優としての道を一気に大きく開いていただくことができました。

そして、その後、ずっと「レ・ミゼラブル」はロングランが続きました。私は2001年までの14年間、そのロングランに参加させていただき、出演回数は1000回を超えました。この間は、ずっとこの「レ・ミゼラブル」を柱に、女優としても歌手としても、どんどん順調にお仕事の幅を広げていくことができました。たとえば舞台では、「アニーよ銃をとれ」という作品で初めて主演をさせていただいたり、民音ミュージカルでも「スターライト・ムーンライト」というオリジナル・ミュージカルでずっと全国公演させていただきました。この時私は、月子ちゃんと星子ちゃんというまったく性格が真逆の一人二役。この写真ですね…… あれがちょっと暗い月子ちゃん、こっちがとても元気な星子ちゃん。二役なので早替えに次ぐ早替えで大忙しの作品だったんですが、初めて民音ミュージカルで主演させていただいたことがやはり生涯忘れられない、感謝の思い出の作品となっております。

そして…… 歌手としても、ドラマ「ホテル」の主題歌を歌わせていただいたことは大きな出会いでした。このドラマ、ご覧になられていた方いらっしゃいますか？ 高島政伸さんが主演でホテルマンのお話で、いつもホテルにちょっと問題を抱えられたお客さまがいらして、その高島政伸さん扮する熱血ホテルマンが、毎回その熱い頑張りで問題を解決して、お客さまが元気になって帰られる、というとても元気になれるドラマで、その主題歌・挿入歌を歌わせていただいたんです。「ステップ・バイ・ステップ」「FRIENDS」「君にできること」「約束」、このようなシングルCDを出させていただき、これがですね、島田歌穂にとっては本当に貴重な、数少ないヒットソングとなっております(笑)、またこれをきっかけに、歌手としてもシングルCD、アルバムを次々出させていただけるようになり、民音コンサートを始め、全国のコンサートツアー、またライブ・ツアーなどもさせていただけるようになりました。あ、これは「スウィート・チャリティー」というミュージカルで主演させていただいた時の写真ですね。本当に「レ・ミゼラブル」ロングランの期間、女優として、歌手として、仕事の上では順調に、大きく世界を広げていただくことができました。

しかし、実はこの間、人生の上では、1990年には…… 次の写真、何だかすごくプライベートな写真で申し訳ないんですが、これは父と母とともに写ってる貴重な写真、数少ないスリーショットを今日お持ちしました。1990年には母が肺がんで亡くなり、1998年には父が心不全で他界しました。大きな出会いであった「レ・ミゼラブル」をやっている間に、両親との別れという、大きな別れの経験があったんですが、でも、父も母もそれは見事な最期を見せてくれました。母は食道から肺にがんが転移したんですが、これが本当に苦しまなかったんですね。いわゆる末期がんの壮絶な苦しみというのは一切なくて、穏やかに穏やかに、淡々とがんと向き合うという闘病生活の末、私がちょうどコンサートツアーで東京を離れていた間に母

は息を引き取りました。容態が急変して亡くなったので、ツアー先だった私は死に目には会うことができなかつたんですけれども、母の訃報を聞きながら何とか踏ん張ってコンサートを終えて東京に戻りまして、最初、母の寝ている姿を、顔を見るのは辛かったんですが、勇気を出してその寝顔を見たときにですね……もう本当に母がきれいなすっきりとした顔で待っていてくれたんですね。気持ちよさそうに安らかにほほえんで眠っていたんです。私はその母の寝顔を見たときに、それまでの悲しい気持ちが一気にどこかへ飛んでしまって、私は思わず母に「ああ、お母さんよかったね！大成仏だね。おめでとう！」っていう言葉をかけていたんです。……まさか「おめでとう」なんて言葉が自分の口から出るなんて思いもよらなかつたんですが、その母の笑顔は一瞬にして、死ぬということは決して悲しいことではないんだって、母は母の人生を精一杯生きて生きて戦い抜いて、何も悔いはないんだなって、これは「別れ」ではなくて、母にとってはここからまた新たな次の人生が始まる「出発」のときなんだ、ということを教えてくれたんですね。母の笑顔が、私に「生と死」、「生死」というものを前向きに受け入れさせてくれた、これも忘れえぬ瞬間でありました。

また、父はですね、もともと高血圧で、心臓系がちょっと弱い人だったんです。晩年、脳梗塞で二度ほど倒れ、でも本当に守られて、またすぐ社会復帰することができていたんですが、結局最終的に心臓が持ちこたえられなくなってということで……。実は父は北海道の美深町という町がふるさとで、そのふるさとに素晴らしい音楽ホールができることになり、父がそのこけら落しの音楽祭の構成・演出・音楽などの一切を任せられ、私も一緒に出演することになっていたんですが、父はその全ての準備を終え、その本番の直前に倒れ、急逝してしまいました。あまりに急なことに愕然とするばかりでしたが、ふるさとのみなさんが「お父さまの遺志ですから」と、予定通り音楽祭をやりましょうと、それも追悼コンサートとして、ふるさとのみなさんが父を送り出してください、という感動的なコンサートにさせていただいたんです。もう、あとから考えれば考えるほど、父は最後までやるべき仕事は全部やりきってぎりぎりまで頑張りぬいてその時を選んだんだなって、父も間違いなく、父の人生を悔いなく戦い抜いたんだなって。人生を誇らしく生きるということを父のその姿が教えてくれました。こうして、私にとって両親との別れは、本当だったら、私は一人っ子ですし、もうちょっと長生きしてほしかったとか、もしかしたら悲しい思い出として残っていたかもしれない出来事だったんですが、母も父も見事な最期の姿を見せてくれたことで、私の中では悲しい思い出ではなく感謝の思い出にさせてもらうことができた。なんて幸せな娘だろうって私は両親に感謝でいっぱいであります。

……すみません、かなりプライベートなお話になってしまいましたが……今日のテーマは出会いについてですが、この別れは、やはり大きなものを私の中に残してもらったので、ご紹介させていただきました。そして、実は、この両親との別れの間に、人生の上での大切な出会いもありました。これがですね……縁がありましたして……伴侶との出会いがございました！1994年。音楽家……あ、ちょっと出家

したような髪型ですが(笑)、ピアニスト、作・編曲家、プロデューサーの島健という人と結婚いたしました。私、島田歌穂というのは本名だったんですが、結婚して今の本名は島歌穂なんですね。学生証も島歌穂となってるんですけど、島田の田が抜けて、たぬきになっちゃいました(笑)。夫はですね、いろいろなジャンルのアーティストの方々とお仕事を一緒にさせていただいています。サザンオールスターズさん、森山良子さん、加藤登紀子さん、それから若い方だとJUJUさん、中島美嘉さん、平原綾香さん、浜崎あゆみさん……それからGRAY、ケミストリー、ゆず……いろいろなジャンルの、年齢層も幅広いアーティストの方々とお仕事を一緒にさせていただいてきました。私自身も音楽活動のほとんどは主人と一緒にやってきました、こういったデュオのアルバムですとか、夫のプロデュースによるアルバムも出させていただいたり、また、音楽活動のみならず、ミュージカルもさまざまな作品の作・編曲、音楽監督として携わってきてくれました。これは「ザ・リンク」という作品の写真。お隣は夏木マリさんですね。この時の音楽監督も夫です。こちらの写真は「葉っぱのフレディー」という絵本を題材にしたオリジナル・ミュージカルで、これはずっと全国ツアーさせていただいたんですが、これ、私ちなみにフレディーという10歳の男の子役なんですけども、夫が全部作曲して、ピアノと弦楽四重奏で生演奏という、贅沢な、本当に手作りの作品ですね。

それから……もう1つ作品の写真があります、これはずっとシリーズではほぼ毎年行ってきました「ダウタウン・フォーリーズ」。歌って、踊って、タップして、コントして、漫才もして……という、なんでもありの大人のミュージカル・レビュー・ショーで、これもずっと夫が音楽監督をつとめてくれています。こうして、音楽活動、舞台での活動、一年の半分以上は夫とともに仕事させていただいてきているのですが、ふと気づきますと、私の両親も、父が音楽家で、母が女優・歌手という組み合わせだったんですね。ああ、なんだか不思議なもんだなあ、なんて思いながら、あつという間に今年で結婚してから20年……20周年となりました。(拍手)すみません。ありがとうございます!

デビュー40周年で、結婚して20周年。幾重にも今年は節目の年になっておりますが、こうして伴侶との出会いなどもあった中、2001年、いよいよ「レ・ミゼラブル」の舞台も卒業し、そこでさらなる新たな出会いがありました。2003年、大阪芸術大学より、突然、「うちの大学で歌の授業をやってみませんか」というお話をいただいたんです。私はただただびっくりしました。自分のことだけで精一杯な私が、まさか教育という場に携わることになるとは。教える立場になるなんて考えられなくてですね。なぜ私にそんなお話をいただいたんだろうとびっくりしました。悩みました。でも、いろいろ悩みながら考えていく中で、ふとあることに思い至りました。実は、私の父は晩年、ある専門学校で、ミュージカル俳優を目指す若い人たちに歌を教えていたんです。それで、いつも父はたくさんの生徒さんたちに囲まれてとっても嬉しそうに幸せそうにしている、「ああ、父にとって教え子の一人一人ってきっと宝物みたいなんだろうな」って感じていた、ふとその光景を思いだしたんですね。ああ、これは決して偶然ではないのかもしれない。これはやはりちゃんと

意味があってこのお話をいただいたのかもしれない。もしかして、父のその思いを、娘の私が少しでも受け継がせてもらうチャンスをいただいたのかもしれないと、このお話をお受けすることにしたんです。…… あ、授業風景の写真ですね、これは。学生と一緒に発声のレッスンをしているところです。

そして、ちょうど奇しくも大阪芸大で教えるというお話をいただいた時、大親友の田中美奈子ちゃんが「歌穂ちゃん、創価大学の通教やってみない？」と誘ってくれたんです。「そうかあ！」と思いました。教えるということになったけれど、私は何かが足りない、何かが足りないって思っていたんですね。ここまでお話しさせていただきましたように、私は小さい時からこういう世界に入ってしまった、仕事をするばかりで学業はどんどん成績が落ちるばかりで…… とにかく命からがらなんとか高校を卒業したという、そんな情けない学歴でしたので、やはり私はここで、教えると同時に学んでいかななくてはいけないと、それも創価大学で学べたらこんなに幸せなことはないなあと思い、美奈子ちゃんからの誘いに私は二つ返事で、「やる！」と言って、2003年、彼女と一緒に創大通教生として入学させていただきました。その時、入学式には創立者池田先生もいらして下さり、本当に感動の入学式を経験させていただきました。とにかく、なにがなんでも頑張っ、4年で卒業しようってあの時は決意をしたんですが…… もうこの今の情けない状況で…… (笑)でも、とにかくやはり、スクーリングで嬉しい楽しいばかり言っているのはダメなので (笑)、今日また伺わせていただいて、非常に身の引き締まる思いで、決意を新たにさせていただいております！

こうして、まさに「教える」ということと「学ぶ」ということを同時にスタートさせた2003年という年も、忘れられない年となりました。そして…… 気づけばもう11年が経ちました。大阪芸大のほうは、最初は本当に試行錯誤しながらのスタートでしたね。私は舞台芸術学科のミュージカルコースというところで、歌の実技ですね、こうして学生たちと一緒に声を出しながら、教えるというよりも、私自身がこれまで現場で体験・体感してきたことの中から伝えられることを精一杯伝えさせてもらう、という思いで学生たちと向き合わせていただいてきました。でも実際には教えるというよりも学生たちから学ばせてもらうことの方が本当に大きくてですね、いつも学生たちと会うたびにたくさんパワーをもらうんですね。言い方を変えると、若さを吸い取っている？とも言えるかもしれませんが (笑)。学生たちとの出会い、なんと大切な出会いの場を与えていただいたんだらうと、感謝することばかりです。いまではもう卒業した教え子たちが実際に社会に出て、どんどん舞台で活躍してくれるようになってきているんですね。私自身も学生たちと実際に同じ舞台で共演できるようにもなって、ああ、なんて幸せなんだらうって。これからも一人でも多くの卒業生と共演できるようにというのが、私にとって大きな励みの一つとさせていただいております。これからも「教える」ということはですね、拙いながらも、使命のある限り、精一杯頑張らせていただきたいなと思っております。

こうして、本当に様々な出会いを経て、気づけば、生まれてはや、どう計算しても半世紀を超えましたが (笑)、でも、振り返れば振り返るほど、つくづく私は、

生まれ育った家庭環境の中で、ごく自然に、なんの抵抗もなく、両親と同じ大好きな芸術の道を真っ直ぐに、たくさんのお会い、たくさんのおチャンスに恵まれながら歩いてくることができた…… 本当に幸せな人生です。

そして…… やはりそこにはいつも母の存在がありました。母の存在が本当に大きなものだったんですね。母の人生をたどっていくと、やはり幼い時から歌ったり踊ったりすることが大好きで、その夢を追いかけて、母もそのまま女優・歌手としての道を歩んだ。私を産んでからは、今度は同じ道を歩もうとする娘の私を、その道の経験者として、常に温かく厳しく見守りサポートしてくれた。最後まで母はショービジネスの世界、仕事一筋に生きた人でした。

そしてさらに考えますと、この母を育てた祖母の存在というのが非常に大きな、それは絶大なものでありました。この祖母はですね、特に母が亡くなってからは…… 母が亡くなったのは母が58歳の時でしたから、本当に早い死だったんですけども、祖母はその悲しみを抱えながら、母に成り代わってという思いだったと思うんですが、私の舞台やコンサート、ライブ、1つも逃すまいという勢いで、2008年に101歳の誕生日の寸前に天寿をまっとうする、その亡くなる数日前まで、ずっと私の追っかけをし続け、「私がボケたり長患いをしてあなたに迷惑はかけたくないからー」って言いながら、最後まで一人暮らしを貫いた、そんな祖母だったんですね。この祖母は1907年に生まれまして、激動の生涯を生き抜いた人だったんですが、とにかく日頃いろんな会話の中で、ぼろっと出てくる昔話があまにもドラマチックだったもので、その波乱万丈の人生を孫の立場から一冊の本にまとめさせていただこうということで、これは2008年に潮出版さんから出させていただいた『私の祖母は「101歳のお嬢様』という本です。この本、実は祖母の101歳の誕生日に合わせて出版することになっていたんですが、残念ながらその5日前に祖母は急逝してしまいました。でも、この本で祖母を送り出す、という大きな意味のある本となりました。今日は、テーマのサブタイトルに、「女性の世紀を生きる」とさせていただきましたので、私にとっての、やはり一番大きな存在の女性である祖母について、ちょっとその人となりを表すような、この本の冒頭部分を読ませていただきますね。

『私の祖母である春子さん、通称春ちゃんは、明治40年生まれ。西暦でいえば1907年生まれで、いたって元気な101歳である。』…… これは101歳の誕生日を迎えるという想定で書きましたので…… 『それはそれは波乱万丈の一世紀を駆け抜けてきた人だ。映画館に行くことが不良とされた時代にも、ひとり堂々とハリウッド映画を鑑賞するなど、映画、音楽、演劇にはかなりのこだわりを持つ“元祖モダンガール”。現在も、東京都内や近郊で行われる私のコンサートや舞台には必ず足を運ぶ。その現役ぶりを物語るエピソードは数えきれないほどあるが、まずひとつ挙げるとすれば、6年前のニューヨークでの珍道中だろうか。当時、今より若いとはいえ95歳という高齢の春ちゃんが、私と夫が参加するニューヨークでのチャリティー公演に同行することになった。』…… ちょっと中略いたしますね…… 『95歳という高齢での渡米は不安もたくさんあるけれど、今回連れていけなかったら夫も私

も悔いが残る、ということで意見が一致。そこで、主治医の先生に相談することにした。「普通は止めますよ」というのが主治医の先生の第一声。でも、春ちゃんをよく知る先生は次のように続けた。「でも、あのおばあちゃんのことでですからね」。高齢で飛行機に乗ることのリスクや、何が起こるかわからないことの心配などを挙げ、医者として、あきらめなさい、とおばあちゃんを説得することはできる、としながらも、「気持ちとしてはやっぱり行かせてあげたい」と言ってくださった。そして、リスクを家族がきちんと承知して、それでも連れて行ってあげたい、ということであれば、と、ニューヨークの知り合いの医師に手紙を書いてくださった。最後に「あのおばあちゃんならきっと大丈夫でしょう」という太鼓判を押して。私は春ちゃんに「ニューヨークに行きたい？」と尋ねた。すると、目を輝かせて「あらあ、行きたいわよ」と即答。「私は女学校の頃からニューヨークが憧れだったのよ」とそれは嬉しそうに語った。さすが“元祖モダンガール”。アメリカのカルチャーに魅了され、親しんできた彼女にとって、ニューヨークは特別な場所だったらしい。さあ、主治医の先生にもらった手紙をお守りのようにしていざ飛行機に搭乗。気圧の変化が心臓に負担をかけるのでは、と一番心配だったのだが、春ちゃんはその心配などどこ吹く風。機内食の和風懐石弁当を「あらあ、美味しいわあ」とパクパクとほぼ完食。飛行機が揺れ、「大丈夫？」とあわてて声をかけた際にも、「まあ、関東大震災に比べればねえ」と、なんとも力強い返事を返してくれたのだ。さすが、春ちゃん。これは先生の言う通り、きっと大丈夫に違いないと、私は妙な確信をもったのだった。』

……これが本の出だしなんですけれども、こうしてニューヨークに無事にたどり着き、到着したその日からですね、いつも私と夫は、例えば10日間だったら15本くらいのペースでミュージカルや芝居、バレエなどを見まくるんですけれども、もう春ちゃんは全部私たちと一緒に行動しました。劇場も全部一緒に行って、劇場を出たあとはライブハウスも一緒に行って、五番街で一緒にお買い物もしまして。自由の女神も見に行きました。この写真、右に立っているのが自由の女神。左にピースしているのが春ちゃん。これ題しまして「二人の女神」という写真です（笑）。こんなことで、春ちゃん、本当にニューヨークを堪能いたしました。ニューヨークの滞在のエピソード、まだいろいろ書いてあるんですが、あと少しだけご紹介しますね。……『結局、10日間に及ぶニューヨーク旅行は、ほとんど奇跡に近かったのかもしれないけれど、主治医の先生の手紙の出番もなく、ともかく無事に終了した。ニューヨークに一緒に行けたこと、そしてなにより、ニューヨークの舞台で歌う姿を見せられたことは、いいおばあちゃん孝行になったかなあ、と思う。ニューヨークに行くという約束を果たし、すっかりほっとしていたのだが、最近になって春ちゃんがぼろりと漏らすには、「本当は私が一番行きたかったのは、ハリウッドなのよ。ニューヨークは2番目」とのこと。なるほど、映画好きだもんね。春ちゃん。ああ、春ちゃんの尽きることのない好奇心には、いつも圧倒されるばかりで、孫ながら「カッコいいなあ」と感心させられてしまうことしきりなのである。』

……これで、春ちゃんの人となりや少しお感じいただけたかと思うんですけれども、

本当に私の祖母は、常に私のそばでいつも力強く、勇気や元気を送り続けてくれた祖母でありました。実は祖母はかなり厳格な家に育ちまして。映画が大好きで、自分も女優もしくは映画監督になりたかったという人だったんですね。でもやはり時代が時代で、なかなかそういうことが許される時代ではなくてですね。関東大震災の時も、実は春ちゃんはいつもの通り、ひとりで映画館に行っていて、そこでぐらっと揺れて、外に飛び出したらうわーっと逃げる人の波。どんどん崩れていく建物。次々と火事が起こって、「こっちに避難してください」と大勢の人が誘導されていたそうなんですけれど、春ちゃんは子供心に「家に帰りたい」と思い、その人の流れに逆らって歩き、小高い丘の桜の木の下で一晩過ごして家にたどり着いたそうなんです。あとからわかったことなんですけど、その誘導された方向は、ご存知の方もおられると思うんですが、上野の被服廠、そこに避難したみなさんが火の粉で…… みなさん亡くなられてしまったんですね。…… なんて運の強い祖母なんだと、もしその時誘導された方向に行っていたら私なんかいないわけですので、祖母の強運に感謝するばかりです。

それから、春ちゃんいわく、「私はおてんば娘だったのよ」と。当時、自由恋愛ということ自体が許されない時代で、ある日、親から突然お見合い話があり、もうそのお見合いが嫌で嫌で、家の窓から逃げ出して、その頃ヴァイオリンを習っていたハンサムなヴァイオリニストと駆け落ちをして結婚してしまうんですね。なかなか最先端を駆けた人だったんです。結婚して私の母とその兄、二人の子をもうけたのちに離婚。なんと、新橋第一ホテルのフロントでホテルウーマンとして働きながら、女手一つで二人の子育てをしていました。戦争中もずっとそのホテルで働いていたんですが、その中で東京の大空襲も乗り越えて…… ところが戦後、そのホテルが接収されるということがわかって、祖母は退職します。さあ、どうやって生きていこうと考え、よし！ 新宿駅の近くでお店を開こうって、最初は、甘味処、甘いものを提供するお店を開いたんですね。飲み屋さんばかりだった中に甘味処を開いてそれがとても人気店になり、でも、そのうちそこが立ち退きとなり、よし！ じゃあ今度はジャズバーを開こうということで、「ノック」という名のジャズバーを開きます。当時はまだジャズのレコードをかけるお店っていうのが珍しかったようで、ジャズメンの方たちがいっぱい常連さんとして集まってくださったそうです。激動の時代の中を、祖母は本当に根っからの楽観主義で、音楽を愛し、演劇を愛し、その社会のど真ん中で女性として母として生き抜いた人でありました。で、祖母は、先ほどもお話ししたように101歳寸前に亡くなったわけなんですけど、これがまた本当に見事な、最後まで周囲に迷惑をかけないようにと…… あ、これはちょうど100歳のお誕生日の時の写真ですね。親戚一同と、親しい方々も集まって下さり100歳のお祝いをすることができたのですが、最後まで自分の生き方、ポリシーを見事に貫き通した祖母でありました。その祖母のDNA、影響というのは、まぎれもなく私のなかに大きく息づいてるなということを感じる日々であります。

創立者池田先生は、21世紀は女性の世紀、と、女性が社会に果たしゆく役割に大きく焦点を当ててくださっておりますが、すみません、手前味噌かもしれませんが、

今回こういうテーマでいろいろと思い起こさせていただいた時、本当におこがましいことなのですが、もしかしたら祖母は、知らず知らずのうち、ちょっとだけでもその女性の時代を一生懸命に引っ張ってくれていた、そんな一人だったのかもしれないなあ、なんて、孫ながら少し誇らしく思わせていただきました。と同時に、やはり私自身が、一人の女性として、祖母のDNAを継ぐ女性として、また一人の芸術家として、これからどう社会に貢献していけるのか、どう使命を果たしていけるのか、ということ深くまたあらためて考えさせていただいております。

とにもかくにも、今年はデビュー40周年ということで、この夏から秋にかけて、この40周年を記念して、大切なさまざま嬉しい出来事があります。これは新しいアルバムなのですが、「MY GRATITUDE」、私の感謝、という意味をこめたタイトルのアルバムを7月に出させていただきました。これはなんとアイドル時代から現在に至るまでの、ずっと歴史を追うような、過去を振り返るような、これまでの集大成のようなオールタイム・ベストアルバムとなりました。

それから…… すみません、ちょっと宣伝みたいになってしまいますが、今稽古している舞台が来月行われます。「三文オペラ」というプレヒトの作品で、東京の新国立劇場で9月10日から始まります。「三文オペラ」、きっとご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、今回は、池内博之さんがメッキースの役、ソニンさんがポリーの役。そして、あめくみちこさん、山路和弘さん、大塚千弘さん、石井一孝さん…… 彼は「レ・ミゼラブル」でずっとご一緒してきた方ですね。こうした演劇界のすばらしい役者さん、ミュージカル界のすてきな役者さんたちと一緒に、今、連日稽古をしているところです。私にとって、また新境地への挑戦という、とてもやり甲斐のある重要な役をいただき、とにかくまずはこれを大勝利させること、これが私の目前の目標であります。そして、この舞台が終わってすぐの10月1日、嬉しいことに、民音さん主催により、五反田ゆうぽーとホールにて「鳥田歌穂デビュー40周年記念コンサート」を行わせていただけることになりました。（拍手）ありがとうございます！これはもちろん夫が音楽監督で、これまでの人生、歴史を振り返りながら、新たな出発のコンサートにできれば、というふうに思っております。感謝を込めて、必ず大成功させられるように頑張ります！

いま私は本当に幸せです。たくさん宝物のような出会いに恵まれて、たくさんの方々に支えていただきながら、大好きな仕事をずっと続けさせていただき……。そして、仕事をすればするほど、自分の中に、亡き母が、亡き父が、そして亡き祖母が、私の中に残してくれたものを深く深く感じさせてもらって……。実は、思えば、母の時も、父の時も、祖母が亡くなった時も、不思議なことに必ず私はコンサートで歌っていたんですね。ステージで悲しみをこらえて歌いながら、ああ、これはなにかを教えられているんだな、と、お前はなにがあっても歌い続けていきなさい、と言われていたような気がしたんです。もう、名前に歌という字が入っているのでしょがないですね。私は、自分の子供を持つことはできませんでしたが、でもやはり、大学の教え子を始め、次代を担う後輩たちに、いつか、いつの日か、それがもしかしたら、なにか宝物になってくれたら、と祈りを込めながら、そ

の小さな原石になるようなものだけでも、自分の声の続く限り精一杯伝えていけたら、というふうに願っております。もちろん、通教も、あの、もうちょっと大学にいられるみたいなので(笑)、なんとか期限いっぱいまでに卒業できるように頑張りたいと思います！ 来年とか、もしスクーリングでまたお会いしましたら「スクーリングもいいけど、レポートやってる？」とちゃんと叱咤していただければと思います(笑)。今日は、母、また女性ということテーマとしてお届けしてまいりましたので、ここで最後に、創立者池田先生の、母に向けてのお言葉を少し紐解かせていただければと思います。

「私の偉大なる師である戸田先生が、ある時私の母の近況を尋ねてくださった。元気な私の母の様子をご報告申し上げますと、先生は、慈愛あふれる声で仰せになられた。「母の笑顔は一生涯心から消えない。僕もそうである。君もまた、同じだろう。世界を本当に明るくするものはいったい何か」。ある人が、「それは、太陽でしょう」と答えかけて、慌てて訂正した。「いやいや間違えた。それは、母の笑顔。お母さんの笑顔である」と。たとえ梅雨空が太陽を覆い隠そうが、吹き荒れる嵐の夜であろうが、わが母の笑顔がある限り私たちの生き抜く世界は永遠に明るい。何物にも屈せぬあの平凡にして偉大な私の太陽。私の全生涯にわたって、わが母の慈愛の心は決して沈むことはないだろう。母の笑顔、あの母の笑顔こそ、和楽と、平和と、幸福への不滅なる一家の太陽であるのだ。その母の楽観主義の光は、地域の太陽となり、世界平和の太陽として昇り輝いている。ある哲人が叫んだ。「母を大切に。母が笑顔でいる日々、その一日一日こそが、最良の日であり、最善の日である。」そしてまた、ある世界的な女性作家は語った。「母は我が家の太陽です。もし母が陰気になってしまえば、我が家から晴れ渡る天気の日が消えてしまいます。」私たちはこの健気な母を幸福にする責任がある。否、使命がある。これが人生だ。この平凡にして偉大な母を幸福にしていくことこそが全世界の平和への第一歩である。平和とは、遠くにあるのではない。政治の中にのみあるのでもない。それは、母を大切にするという人間学の神髄の中にこそあるのである。」

…… 今回、この講演をさせていただくにあたり、本当にいろいろなことをあらためて考えさせていただきましたが、私も、これからも、いつの日もどんなときにも、母のような太陽の笑顔を忘れずに、目の前のお一人お一人に勇気と希望を届けられる女性になっていけるよう、それにはやはり、ただただ自身の生命を磨き続けていく以外ないんだ、と師匠との原点のご指導を深く思い起こさせていただいております。これからも、とにかく自身を磨き続けて、笑顔を絶やさず、前向きに前向きに歩いていきます！ ということをここにお誓いし、本日の講演を締めくくらせていただきたいと思います。本日は長時間、本当にありがとうございました。

せっかくですので、一曲歌を歌わせていただきたいと思います。(拍手) ありがとうございます。…… では、今日は最後に池田先生の「母」についてのお言葉で締めくくらせていただきましたので、いろいろな思いを込めながら、やはりこの曲をお届けしたいと思います。これは、主人がピアノでカラオケを作ってくれました。今日、この場を設けていただきましたこと、こういうチャンスをいただきましたこ

と、先生方に、そして創立者池田先生に心から御礼申し上げます。そして今日お越しいただきましたみなさまに心から御礼申し上げます。どうか、明日の試験が大勝利となられますように！ また、今度お会いするときは通教生同士として、この学び舎でお会いできますこと心から楽しみにしております。私も頑張って卒業します！ では、感謝と決意を込めてお送りします。

「母」、お聞きください。

司会：どうもありがとうございました。それでは島田歌穂先生の40周年をお祝いして、花束を贈呈させていただきたいと思います。40周年おめでとうございます。素晴らしいご講演とお歌をありがとうございました。

それでは以上をもちまして講演会を終了させていただきます。みなさま、本当にありがとうございました。